特別
イ 4
3163
1(5)

拾遺和歌集巻第一

春

平さたふんか家の哥合によみ侍ける

壬生忠岑

春たつといふはかりにやみよしのゝ
山もかすみてけさはみゆらん

承平四年中宮の賀し侍ける時の屏
風哥

紀文幹

はるかすみたてるをみれはあらたまの
としは山よりこゆるなりけり

ひらさよのこと侍けるに

山辺赤人

昨日こそとしはくれしか春霞
かすかの山にはやたちにけり

冷泉院東宮におはしましける時歌
たてまつれとおほせられけれは

源重之

よしのやま峯の白雪いつきえて
けさは霞のたちかはるらん

延喜御時月次の屏風に

昌平坂文庫

素性法師

あらたまのとし立帰るあしたより
まだるゝものはうくひすの聲

天暦御時歌合に　　源順

こほりだにとまらぬ春の谷風に
またうちとけぬうくひすの聲

題しらず　　平祐挙

春たちてあしたの原の雪みれば
またふるとしのこゝちこそすれ

さたふんか家の歌合に

忠岑

春立といふはかりにやみよしのゝ
山もかすみてけさはみゆらむ

題しらず　　よみ人しらず

香をとめて梅はまふらにこよひより
山のはの雪もとけそめぬらむ

天暦十年三月二十九日内裏歌合に

中納言朝忠　按中納言

鶯のこゑなかりせはゆききえぬ

山里は雪ふりつみて
みちもなしけふこむ人をあはれとはみむ

大伴家持

うちきらし雪はふりつゝしかすかに
わかへのそのに鶯そなく

題しらす

梅か香をそてにうつしてとゝめては
読人しらす
はるはすくともかたみならまし

延喜御時宣旨にて屏風のうた
つかまつりけるに

貫之

梅か枝にふりかゝりてそしら雪の
花のたよりにをらるへらなる

同御時屏風に

躬恒

ふる雪に色はまかひぬ梅の花
香にこそにたる物なかりけれ

冷泉院御屏風の絵に梅の花ある家に
まらうときたる所

平兼盛

我宿の梅のたち枝やみえつらん

わかれの思ひは黒かみのすちまよひけれ
無艶清直風なり
躬恒
香をとめてたれをらさらん梅の花
あやなしかすみたちなかくしそ
もとのうたにすき給ひ無艶清直風なり
貫之
自然のこゝろにかなひて心にかけて
いわれもしらすおもはすしてうつる
影をしそ思ふ
人麿

あかつきのうちに播磨とて作思の
あしたの雲いふゆやまとの
極右者良の家の庭風なり
つらゆき
野辺みれは若菜つみけりむへしこそ
かきねの草も春めきにけれ
若菜をつみて
古今
融院清紫
春日野にあさはの雪まつつと
光なき物はわかなゝりけり

たゝしゆく　大伴家持
春の野にあさる雉子のつまこひに
をのかありかを人にしれつゝ
おほ谷の名に宮内といふ人のいへに
かわらけとりてみすとていこの侍りの哥合
とろふいかゝ経よ鶯へなる兼盛
小笠原の御牧に正月のいつかの
日つきまつれはや
松の人にまく鶯の鈴なき
ちりの絵のとふかへりまし

影さしけれは　忠岑
子の日する野辺にこまつのなかりせは
千代のためしに何をひかまし
入道式部卿のみこの子の日し侍る
所に　大中臣能宣
ちとせまてかきれる松もけふよりは
君にひかれて万代やへむ
延喜御時の屏風に水のほとりに梅
いたりけり
梅の花まだちらねとも　貫之
ゆく水の

わこにうつりゆくへみえてしるけれ

題不知　　讀人しらず

つきたちぬことゝおもふにうすき梅の

難波のさとにうつるまつわ

梅もよりの明ののこやまもこゝの

ともおもひわか香まてしるしめ

袖にみえて匂ひもふかきに

あかつきはいひもそもかもえこゝん

皇太后宮大夫

鶯まちきおぼえてうつろふ梅はやはらかに

更けゆく深風のしほやきより

吹風とゝもにほひくる梅華

ちりまくもおしき時しも香はいつまでもかゝる

大中臣能宣

我やとの梅にくるとも風はうちはらふともこぬ

ゆきてくるやまにかゝらうちとえらん

讀人しらず

ともしはかなき風にうつる梅の

いとはふのくれなゐさきてちるらん

春風は　大中臣能宣

ちらさてみたれもみたりける青柳の

いとをよりそへみたれつゝまつる

さとはこ次　凡河内躬恒

青柳のいとよりはへておるはたを

たれもふくのうくひすのき羅

よみ人しらす

花のみはちりはてゝ根とひきる枝の

ならのはもとはくるともなし

子日すとてまつりをひく秋なけくるゝ

小萩さく　中務

咲ぬるはまもとめいくし山のまつ

思ひつゝまさめなるのゆへの野へ

影しらす

よし野山たえす雲のたなひくー

人よりもきえぬともやとくし山まて

天暦九年内裏歌合

よみ人しらす

さくらたえのにほふよりまた山桜

峯のしら雲たなひくらん

たゝしこまた、
吹風にあらしといひそめしはこの
山かせとふらいはしめにかわ
菅家万葉集にのせたり
あきの夕ともは菅家八つめとも
これ秋そのはしめ也とかゝれしから
歌しはし次 清人にこゝろを
吉野山きえせぬ雪とみえつゝ
峯つゝきさくらともかくあれゆるはまさ
天暦御時麗景殿女御歌合

文なと云会し侍りしに 清原元輔
末の露たちのこるやうにはりうちたえぬかは
かそへたにあかぬ山はちるまゝを
年をふるなれの家の歌会なり
宮こ人は
春いるもそとのにはよりまかせたるに盛
かりとそまさ人いあしきみ
賀の春風に 藤原千兼
さくらそめいくよ経ぬらん桜花

ゆくをちは人まあはれとみえつく
天暦御時御屏風に　忠見
あさく秋はまつのうちはふかいつのも
めつらしけなき山田のかしも
家にし次　在原元方
春日まてこそ山田のこもちは打とけて
人のあらのはまよひ衣かまつかわ
承平四年中宮の賀し侍ける時
屏風に　斎宮内侍

春の田を人にまかせて我はたゝ
花にこゝろをつくるころかな
宰相中将敦忠朝臣家の屏風に
つらゆき
あたなれと桜のみこそふるさとの
むかしなからの物には有けれ
亭子院屏風に山みちに人あるかた
伊勢
ちりちらすきかまほしきをふるさとの
花みてかへる人もあはなむ

題しらす　よみ人しらす

桜乃花ハ雨にわきわかすのよくい
めくともちるらんみけはかくれん

元真

とふ人もなしとおもひし山里に
花のたよりに人めみるかな

延喜御時三尺乃屏風に

平兼盛

花乃またちとをくもしつくなれは
あかやとよりそまつ人の

宴し侍しに　源しけゆき

さきまさるゝよくみゆる花のはなめんし
こゝろあるしらせもあすかやめは
桜さき井のさくら乃花の木のもと
あかぬ人侍りけり

藤原長能

何かはと二ねもあやとをく華とかはにしき
いつまてかは梢の花もこちらの秋

題しらす　よみ人しらす

人まちてとあつかはしかのきわさ山かけ

なをもふるきことのはをやとりしけれ
あさのゝ露をわかれくらはゝを
桜のこゑやまさくらをしくれん
三唐法晴吉庵風り

芳菜清正
ちりまかへる華のかけはるの旅の
あつまにいまそかり日もくかゝりけれ
哀しゝ次　清人志をき
清うやんれのにもちりまさらは桜も
ころつま人よきかやとかくわたるそ

庵風り
うしなふ
地すへ見しかも若葉をと見ぬ桜をなや
あけつつのしけいもなきつとも
たんこつまを　夕遊てしく次
見しそれをて思へいちるかな
つけそこゝゆの竜まなあれのなか
定喜法晴芳つゝの女は清ち命のほか
袂ことに我なく庵宿の庵とこうら
もちるほとなく手もち舟それ年
あれなそく人も清まつりのさかりの桜

乃咲みゆるまて何かりちなき冬なれは

恵慶法師

浅茅原ぬしなきやとの桜花
心やすくや風にちるらん

小野の宮の家の屏風に

貫之

春ふかく成ぬと思ふを桜花
ちる木の下はまた雪そふる

亭子院歌合 貫之

桜ちる木の下風はさむからて
そらにしられぬ雪そふりける

題しらす 読人しらす

足ひきの山路にちれる桜花
きえせぬ春の雪かとそ見る

天暦御時歌合

小弐命婦

あしひきの山かくれなる桜花
ちりのこれりと風にしらるな

題不知 よみ人しらす

岩乃ちまたにしくる瀧の水をせき

ちりつもる萬乃錦はいとゝまされん

天暦御時歌合に
源順

春ふかみゐての川浪たちかへりみてこそゆかめ款冬の華

井手といふ處にやまふきの花の咲たりけるを見て
恵慶法師

山吹の花のさかりに井手にきて
このさと人になりぬへきかな

屏風に
中務

物もいはてなかめてそふるやまふきの
はなに心そうつろひぬらむ

題しらす
よみ人しらす

きしのまに蛙なくなるやまふきの
うつろふかけやそこにみゆらん

我宿の八重山吹はひとへたに
ちりのこらなん春のかたみに

亭子院歌合に
坂上是則

もとの心はちよをつくしとめくりてこゝや
まよはれのちるのかけやまよひそ
題しらす　　読人しらす
春霞立別ぬるやまちには
もえぬまゝとちりまかひけれ
年のをとつへみなつきぬれと
毎年そたゝもろ手毎にをしみぬらん
延喜御時春宮御屏風に
貫之
風吹はかたもさためすちる花を
いつかたへとて春のゆくらん
天暦御時月次御屏風に
花もみなちりぬる宿はゆく春の
ふるさとゝこそなりぬへらなれ
閏三月侍りけるに
躬恒
つねよりものとけくわかれはすきぬると
くるゝ春はなかくは有けり

拾遺和歌集巻第二

夏

天暦御時歌合　　大中臣能宣

鳴声はまだきかねども蝉の羽の
うすき衣はたちぞきてける

屏風に　　順

わが宿のかきねや春をへだつらむ
夏きにけりとみゆる卯花

冷泉院の東宮におはしましける時
百首うたたてまつれとおほせられければ
　　源重之

花の色にそめし袂のをしければ
衣かへうきけふにもある哉

　　盛明のみこ

花ちるといとひしものを夏衣
たつやおそきと風をまつかな

百首うたの中に　　源重之

夏にこそさきかゝりけれ藤の花
松にとのみもおもひける哉

ちりしとのこゝも木々もひくまれあ

金葉 陽院にて屏風九月

平 兼盛

住よしの岸の若なにいつやと源

まつのこまちはりしといましるし

吉るふ

紫式部 ちはなちてくもつのこまとくりしをそ

もとの心とまちも見てよて有りる

延喜御時花合に若菜宴侍

小野宮太政大臣

ひくの時よ

うゆくこの見える時そことの若なたえ

えとこみわのしとも杉もふ

郡之つ文

さくも見りそ あくもの花のおくの山の南

躬恒

うこゑみえてまえ浪 むつかしのすふ

たこの浦の藤の花を見侍りて

柿本人麿

たこのうらのそこさへにほふふちなみを

かさしてゆかむ見ぬ人のため

山里の春の夕くれきてみれは

平公誠

ふりもせぬ雪かとみえて梅かえの
なかのみなもとにちりかゝる
貞信公之家
うの花のさけるかきね
まつりにかけしぬさかとそみる

延喜御時月次屏風に
みつね
神まつる卯月にさける卯の花は
しろくもきねかしらけたるかな

つらゆき
神まつる宿の卯の花しろたへの
みてくらかとそあやまたれける
題しらす　よみ人しらす
山賤のかきねにさけるうの花は
たかしろたへの衣かけゝん
みつしほふれる雪かとみるまて
うきねのたゝるをるあふちも
まさけそきりくれともそかもしれ
山郭公
おもわすかなくさえん

新勅のきゝ侍りより　郭公
木のくれになりぬるものをほとゝきす
なにかきなかぬ君にあへる時　久米廣縄
ふたかみの山にこもれるほとゝきす　遊行女婦土師
山郭公いまもなかぬか君にきかせむ
延喜御屏風に　貫之
山里にしる人もかなほとゝきす
なきぬときかはつけにくるかに
題しらす　讀人しらす
やまもとく　とゝ　やとしもとまるとはみゆる
ゆく人もあまきよもやなきける
天暦御時歌合に
坂上望城
ほのかにそなきわたるなる子規
み山をいつるけさのはつ聲
平兼盛
深山出て夜半にやきつるほとゝきす
曉かけて聲のきこゆる
寛和二年内裏歌合に
右大将道綱母

都人ハねてまつらめやほとゝきす
いまそ山辺をなきていつなる
女のみこ式子内親王
坂上是則
山川と人ハいへともおもふ[illegible]
ゆきつもる[illegible]雪の[illegible]
天暦御時の哥合に
壬生忠見
こひすてふ[illegible]
[illegible]
人つて[illegible]

村上法皇の御屏風に 伊勢
ふる都と[illegible]
夜ふかく[illegible]
小宮のもとの屏風に
源公忠朝臣
桜さく[illegible]山[illegible]
ひとゝ[illegible]
新[illegible]家の屏風に
つらゆき

このまゝにふかのなつ／＼かゝめあて
山ほとゝきすこゑをなかなん
延長御時哥合
よみ人しらす
五月雨はいちつくろ河しとゝ八乃
あやめくさひくともしらぬにわ
屏風に
大中臣能宣
昨日まてよそにおもひしあやめ草
けふわか宿のつまとみるかな
題しらす　讀人しらす
いつゝ舞ふ色のうくふちわかれは
あやめのくさの唐のきゝして
延喜御製
あしひきの山郭公けふとてや
あやめのくさのねにたてゝ鳴
よみ人しらす
たか袖におもひよそへて杜鵑
はなたちはなの枝になくらん
天暦御時御屏風にゑとのゆらゐする所
壬生忠見
あけつゝきさま

いつるまちまち[illegible]月[illegible]
よそみ[illegible]
しのはこともまた[illegible]
千年のやと[illegible]人わかれは
小野宮太政大臣家の屏風に[illegible]
[illegible]郭公なきたるところに
つらゆき
かのかたにはやこきよせよ郭公
みちになきつと人にかたらん
[illegible]家の歌合
みつね
郭公をちかへりなけうなゐこか
うちたれかみの五月雨の空
題しらす　よみ人しらす
なけやなけたかたの山の郭公
この五月雨に声なをしみそ
五月雨はいつかやむへき[illegible]
よふかくふかの[illegible]思ひたえつと[illegible]
まちそ人おもひ無き物を　讃岐
[illegible]なのよはわか名をなく

大伴坂上郎女

郭公いたくなゝきそひとりゐて
いのねらえぬにきけはくるしも

中務

夏はよのゝこゝろはしはしつゝほとゝきす
たゝやもとをすなをはもゝしなも秋
明つかたのうしゆきこのふあかりや
きこあくあやくくやしらるらむ

延喜御時中宮歌合

よみ人しらず

夏くれはふか草山のほとゝきす
なく声しけくなりまさるなり

東宮にさふらひける絵にくらはし山
に郭公とひわたりたる所

藤原実方朝臣

五月やみくらはし山の郭公
おほつかなくも鳴わたるかな

題不知

よみ人しらず

ほとゝきす鳴やさ月のみしか夜も
ひとりしぬれはあかしかねつも

西宮の左大臣家の屏風に
源順
子規まつにつけてやともしする
人も山へによをあかすらん
延喜御時月次の屏風に
つらゆき
五月やまこのしたやみにともす火は
しかのたちとのしるへなりけり
九条右大臣家の賀の屏風に
平兼盛
あやしくもしかのたちとのみえぬ哉
をくらの山に我やきぬらん
女四のみこの家の屏風に
これのり
松くまいまそ遠の秋と夜山の
このしたかけそ立うかれぬる
延喜御時御屏風に
貫之
夏山のかけをしけみや玉ほこの
みちゆく人もたちとまるらん

河原院ハいつきのしほり
ありし人はれて
夏なし
松かけの岩井の水をむすひあけて
なつなき年と思ひけるかな
家はまとをくて侍りけるころ
ことに人のまへはなかりけれは
伊勢
いつこにもさまよひもとめて我宿の
やまとうつしにたまとひやなし

影しのに
ゆめ人さへうつると
うこきよむかけのうき川かせやはらむ
いつしかふりこしとても神はきゝなん
菅原長綱
とはなかたひなおふる神もしらしなみ
くふいかなしのかしへなわかわ
ゆめ也とまほし
若菜ハさきへゆくかわかなん 小倉山
嶺まつはなもみちは有りけり

右大将定国四十賀に内より屏風
てうしてたまひけるに

たゝみね

おほあらきのもりの下草しけりあひて
ふかくも夏の
なりにけるかな

拾遺和歌集巻第三

秋

秋のはしめによみ侍ける

安法〻師

夏衣またひとへなるうたゝねに
こゝろしてふけ秋の初風

題しらす

よみ人しらす

秋はきぬ龍田の山もみてしかな
しくれぬさきに色やかはると

延喜御時屏風に

貫之
荻乃葉のそよく音こそ秋風の
人にしらるゝはしめなりけれ
河原院にて荒たる宿に秋来と
いふ心を人々よみ侍りける　恵慶法師
八重むくらしけれる宿のさひしきに
人こそ見えね秋は来にけり
題しらす　安貴王
秋立ていくかもあらねはこのねぬる
あさけの風はたもとさむしも
延喜御時の屏風に　躬恒
ひこほしの妻まつよひの秋風に
我さへあやな人そこひしき
つらゆき　[illegible]
秋風に夜のふけゆけはあまの河
河の瀬に浪の立ゐこそまて
題しらす　柿本人麿
天河とをきわたりにあらねとも

秋の出ハいとゝしまれにまつそ
天川こそのわたりのうつろへは
あさせふむまに夜そふけにける
よみ人しらす
さ夜ふけてあまの河原にちとりなく
おもふさへあふものを雲やへたつる
湯原王
ひこほしのおもひますらん心より
みるわれくるしよのふけゆけは
人丸

年にありて一夜いもにあふひこほしも
われにまさりておもふらめやも
延喜御時月次の屏風に
貫之
七夕にぬきてかしつるからころも
いとゝなみたに袖やぬるらん
右衛門督源清蔭家乃屏風に
ひとゝせに一夜とおもへと七夕の
あひみむ秋のかきりなきかな
左衛門督藤原懐平家屏風に

恵慶法師

いつしかに[illegible]月日をたのむ[illegible]

[illegible]思ひ[illegible]

七夕庚申にあたりて侍りしに

[illegible]家

[illegible]

[illegible]七夕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小野宮太政大臣

[illegible]

いかにかくつゝむ人のまよふかな
世にも我のみしほそくて人目はまつわれて
よしなふ
雪のふかくしほゝあるよにかくつゝまし
あやなくかたやかくれん
李かしらせ名のこしてしつ
しら露のたくへまにしらつゆと
あかいろ人ふ人そかけて
嵯峨野にかくいひかりて
前兼光阿

日くらしにたつ雅も見つゝめしきかはも
秋の色もやと更深しつゝまう
宵のまに雁の鳴声をまちは待
喜多法師
萩の葉もやこゝろふかくなきならに
あはれとうつろひゆくなかをとめ
紫式部 らうとおん人 土 次
かはりもそくくなるかはや秋の野の
花そらふほとてりのしくらかへ
たいしまて

秋の野の華に名をとめてめしけれ
つまなきことを人はかりける

紀貫之
さくら花とくちりぬとも思ほえず
人の心ぞ風も吹きあへぬ

凡河内躬恒
ちりにのこ人のたちまちものを思ふ
むかしにたちかへりつゝ
立田河の紅葉に風のわたれば
こゝろとて色にはあらぬ

伊勢
うつゝにも君にしあはむ花ちれは
あさみやこ人も見ずやあるらむ

家持
こゝろしくかはとあきにしあはむ
まつちひこしらぬまにまに
かつらきの山のまにまに

大弐三位
春たちの空の色のこゝろから
ありまやまのさゝはらに

延喜御時月次屏風に
つらゆき
あふ坂の関の清水にかげ見えて
いまやひくらんもち月のこま

屏風に八月十五夜池ある家に人
あそびしたるところ
源順
水のおもにてる月なみをかぞふれば
こよひぞ秋のもなかなりける

水に月のやどりて侍るをみて
よしのぶ
秋の月浪の底にぞいでにける
待つらん山のかひやなからん

廉義公の家にて紙絵に秋の月をも
しのびて池ある家に月みる所
源兼明 右衛門督
秋の月かげはあるほどと見えつるを
かくれなくよひのけしきなりける

冷泉院御時八月十五夜けふ前に
もとすけ

あ秋のこゝろも見えぬといふのこ暮を
あくまていらみゐる旅のよはの月
延喜御時八月十五夜花人〻あ来
のことし月のえんし侍りけるに
藤原経臣
白雲るよ光そやとれる秋の月
いつもかはらぬ雲の上にも秋
松すむ鶴清庭流り
見ぬは
いつこよりとも更の月のかへりたるらん

あかぬは人のこゝろのはやはわかれ秋
影さえて ○ 題
経東見えとあかされ旅の月
こよひのかけよ雲ゐのうへのもとの夜
廣幡家出題よみ侍るにあまのよの方
出とて 題 影をとめんなるなき
前大納言為家
松陰のつゆにぬれてちらすまゝの虫の音を
たのめいくよかゝるやはみえまれ
あ秋り出て 虫をいふち侍そ

俊頼

いくよしも草は枕とむすはしを
ゆきを惜とも思はましやは
原風よ　　　　　つ桜花
秋くれは野にみるものゝあはれなる小
かはりし葉も見え桜乃露かゝる
たゝみしも濃く秋の色
契りなき人をや過ぬる桜の野路小
人まつむしの声のきかぬ
野道

露のくまてにはいつくもしらぬ
たゝまれそ桜の花桜花のまゝ
常盤潟原風よ
俊頼
さまのはりしそこともにたつしる桜散を
あはれなるもあはれつゝ桜かな
（三イ）二条乃きさいの宮の北の方の御屏
風よ九月九日の所
忠岑
吉野紹乃菊乃しらつゆのおきしに

こひそつもりて淵となりぬる

影不知　中納言

長月の九日ことにつくきく法

菊もひらくる花はありけるかな

右大将宗家屏風なり

常ツ子

ちとせまてかきれる河の青苔

山の末の郭公もまちかねつゝ

延喜の御時屏風なり

つらゆき

風の音にもまつかはる秋の

菊の上の露ものまかせる

三百六十首の中なり

曾禰好忠

神まりのみむろの山をあきゆけは

こゝろ草のうらみてもかけらるゝ

さしも　大中臣能宣

もみち葉をおとしまかすの山は吹風落

立つや　嵐にちるらん

もみち葉をぬさと常盤の山はちるらん

城の秋ちるまでや秋をしるらん

よみ人しらず

秋風ふきしく吹こしより立秋ぞ

尾上の松のとをのみねかなれ

緑の松もときはかくものうつも落

ひとゝきとおもふまくるらん

錦きる人もこそ備ゝ人もこれ佐保山の

もとよりはわやとよもも錦に霧の立

はまてて続れをぞ

惠慶法師

紅葉ゝ小やしみるまゝにしもやとや

ことはりにのきまゝ立かくるらん

さいしまと よみ人也

もみぢ葉の散て錦の大ぞれ

おもくも見てこそ山川の水

大井河のよへ まおかさかのよみを備

よ よしのぶ

紅葉ゝもとしらい我こそかぬとも

小倉のさみねにいたく

影さへ 讀人不知

秋霧のたなひくかしきやまのはの
もみちもみちのうしきありまかくて

大井河よ紅葉かふかのつゐけしさえ

健守法師

水のおもよ紅葉のかゝりきぬれて
川瀬よ波のたちゐのうへ

西宮左大臣家の屏風に大井河
よみちはちりくれしなくともつゐ紅葉ふ
とある所

忠見

おもかけにいむしちりの山の秋

しくるゝ

紅葉はいろこきまのもみちのくれは
東山よ紅葉みにまかりて又の日つ
とめてまかりてよみ侍りける

恵慶法師

昨日よりわくらふいまのもみちの紅葉ふくの
あしたのみこそいかにそや風にふかん

天暦御時殿上の小舎人のことも紅葉
みにまかりて大井よまかりもまかり

源延光朝臣 大納言

紅葉ゝもちてとくとゝ小倉てかくてまふらん

風のこゝろもしらぬなるまて

源重光 上元祖不見 大和物語ニ名明父

梅ふりてみえをまかへしはもみちは
おもはんとうもちまえにしよりは

頼之 かつや

川香月の小もとをこえてさきめけれは
うつろふ梅は山のかけにも

竹生嶋にまうてゝ侍りける時紅葉の
けさちりけるを見て侍りける

清原敏 延暦 長大僧都

見わたせは秋の山邊もてらしつゝ
ちるもみちはゝにしきなりけり

二條右大臣の粟田の山里の障子に
旅人の紅葉の下にやとりしたる所

恵慶法師

いまよりはもみちのもとにやとりせし
をしむに旅の日かすへぬへし

まてしはし人もこそ見れ
とふ人もなくてはあらしの山の
人もみえしの錦をそしき

延喜御時中宮の屏風に

貫之

ちりぬへき山の紅葉を秋霧の
やすくもみせすたちかくすらん

題しらす　　僧正遍昭

秋山のあらしのこゑをきく時は
このはならぬみそ散ぬへき

つらゆき

秋の夜ニ雨ときこえてふりつるは
風にみたるゝもみちなりけり

心もてちらんたにこそおしからめ
なとかもみちに風の吹らん

あしひきの山のもみちをわかくにこ葉
のいろくらまてはうつろは

右衛門督公任

朝まためき嵐の山のさむけれは
もみちの錦きぬ人そなき

題しらす

よしのふ

秋きりの峯にもをにもたつ山は
紅葉のにしきたまらさりけり

大井に紅葉のなかるゝを見侍て

壬生忠岑

いろ／＼の木のはなかるゝ大井河
しもハかつらのもみちとや見ん

亭子院にて

まくらとそたちもとまらぬ紅葉ゝ
あらしふく山のふもとをまろき
く紅の嵐に吹ちらされて
流るゝ紅葉なりけり

千里

冬て松く嵐の音に
もみちもとくる深し

中納言

有助

拾遺和歌集巻第四

冬

延喜御時内侍のかみの賀の屏風に　紀貫之

あしひきの山かきくもりしくるれと
紅葉はいとゝてりまさりけり

寛和二年清涼殿のみさうしに
あしろかきたる所　　　読人しらす

網代木にかけて洗ふからにしき
ひをへてよするもみちなりけり

時雨し侍る日　　つらゆき

[illegible]
おもひ[illegible]やまし神無月[illegible]

題しらす　　よみ人しらす

神無月時雨しぬらし葛のはの
うらこかるねに鹿もなくなり

[illegible]と龍田河[illegible]紅葉[illegible]
[illegible]
まつ[illegible]
　　　柿本人麿

たつた河の紅葉ゝなかる神な日の
みむろの山に時雨ふるらし
ちるまのゝまゝ紅葉を見て作て
僧正遍昭
吹ふし萩枝に一むらのこゝろを秋ちる
秋の野ゝ花ゝちりなんことも
延喜の時女のみこの家の屏風に
貫之
なつ秋くれは山ちらハ見ゆる唐錦
たち見のゝとも其ちらふるかわかり

屏風に
平兼盛
時雨ゆへかつく袂をよそ人は
もみちを拂ふ袖かとや見ん
百首うたの中に
源重之
あしの葉にかくれて住し津の国の
こやもあらはに冬はきにけり
題しらす
つらゆき
おもひかねいもかりゆけは冬の夜の
川風さむみちとり鳴なり

よみ人しらす

さ[illegible]

い[illegible]山[illegible]

東[illegible]

う[illegible]

水鳥の[illegible]

あ[illegible]

よも[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲のうへに[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

野[illegible]

橘[illegible]

池[illegible]

夜[illegible]

紀友則

花の[illegible]

池の水さへさえまさりける

よみ人しらず

水のうへにおもひし物を冬の夜の

こほりは袖の物にぞ有ける

屏風に　平かねもり

年ゆくとよその御をもみしかども

とくれともふらぬつもるにかある

題しらず　讀人しらず

山越えてこゝろはひとりこえぬれど

菅野の瀧はたゆるともなし

恒徳（懦イ）公家屏風に

よしのぶ

冬ちかく秋はすくるの錦も言葉の

松はつひにそきあへぬかな

中納言家

言葉のまくらにそ露おくらし

色もとにもまたやをとこゝみのまれ

題しらず　紀友則

夕されはいとゝほさほの河原のかは霧に

ともまとはせるちとりなく也

人麿

霰ちりて山まくらゆきあはし波の
まきの松山波のこすなり

廣義公家歌合によみ侍ける

清原元輔

冬の夜の池のこほりのさやけきは
月の光のみかくなりけり

題しらす

讀人しらす

小夜の池のうへハこほりまてもとよ思ふ
いその月はすこしくれん

月をみてよみ侍ける

恵慶法師

あまの原そらさへさえやわたるらん
こほりと見ゆる冬の夜の月

初雪をよみ侍ける

源景明

都にてめつらしと見る初雪ハ
よしのゝ山にふりやしぬらん

女もとくるしひ侍りけるをとしはふ
冬侍りしとうたく侍りけるは

雪中望遠山といへり

北畠家

あけはてもまたふかくこそ松の雪の
うちやまもしらぬもくるゝかな
しらぬの雪の中まてうすくれなゐ

伊勢守

見よしのの山のはしら雪ハ
ふかみるもみちの紅ほとまて
朝霞の春風なり

貴之

よそなからいつとも月にまもる家の
庭しらぬよ山雪
たにひとよしのふ
家々の雪まてけふ山のはれて流
よしのゝ山ハかすみしろみて
春風絶えて白山のき
て行かくるしらつなり

右京大夫
従四位上右中将
部頭摂津守
云々

家のうちまてこそのひらにかゝるとも
雪のうちはけふあすをこゆる

題しらす　たゝみね

年ふれはこしのしら山おいにけり
おほくの年の雪つもりつゝ

入道摂政家の屏風に

かねもり

見わたせは松の葉しろき吉野山
いくよつもれる雪にかあるらん

たいしらす

山里は雪ふりつみて道もなし
けふこむ人をあはれとはみむ

人丸

あし曳の山ちもしらすしらかしの
枝にもはにも雪のふれゝは

右大将定国家の屏風に

貫之

しら雪のふりしく時はみよしのゝ
山下風に花そちりける

冷泉院御時御屏風に

かねもり

人しれす春をこそまてはらふへき

人なきやとよりかゝりし雪
香風は　うけ給
召ろしきに春をへちらてあゆめは
あわれみてまとへる花のにほへる
大僧正に
梅の枝そへてかへさむ雪はのこりきたに
二こゝろとひのもゆるとうらみ
香風の絵に御名乃所
よしのゝ
あかねぬるをかはらぬ千歳とゝもにはしはへなむ

みそのゝよろつきせぬにちよもさかゆらん
庭梅風晴の香風より
貫之
としのはをたにつゆなるつとへいはきし
かへし雪とゝ共にきえなん
香風乃色に似名乃あかりけり梅
のまはけさそて年経るかある
しらかはしろくもきえてやおき
おしみたちとも
よしの姫

雪わけし跡よりさきに帰るらん
まらうどのけふとまうして
唐風の絵に御名の前
つのまて
人はいさおもひやもしらん先く姿を
としのこつもる雪といふらん迎
新居の唐風に十二月つこもり
のよ
かりそめとハ我もしりける空有そ
たくまじむらと何のさく殊ん

百首続のあり　御題にて
いさつもる日とはなとしもいはなとハ
しし名め
よるをとハあはれと
きのふを
うみこまよ

拾遺和歌集巻第五

賀

天暦御時斉宮くたり侍ける時の
長奉送使にてまかりかへらんと
する　　中納言朝忠

万代のはしめとけふをいのりおきて
いまゆくすゑは神そしるらん

はしめて平野祭に男使たてし
時うたふへきうたよませしに
　　大中臣能宣

千早振ひらのゝ松の枝しけみ
千世もやちよも色はかはらし

仁和乃御時大嘗会の哥
　　読人しらす

かはふのゝみのゝお山のさゝ露の
みとせハ君のこゝろのまゝにわ

贈皇后宮乃うふやの七夜に
兵部卿致平のみこのきしのかた
をつくりて侍ともちてそ
ちゝゆひて侍りける

清原元輔

ぬきまきよあまの思ひにたへつ縁は
ちよの坂ひつきのりしめ歌かれ
藤氏のうぶ屋にまかりて

よしのふ

二葉よりわがたのもしきふしみ山
こころざし松のよはひもくは
うぶ屋の七夜にまかりて
君がへんやちよのかずの代にかぞへは
ろくなかりけり七日なりけれ

右大将藤原実資うぶ屋の七夜に

平兼盛

いつしかも千年の松は七つよりわかれ
のちせの里ともみゆるやちよ
君か人のふみやりのまのわたて

よしのふ

千年とも緑はきえめよの中に
かぎりなきおもひ人をたのみて
藤原繊伊元服し侍りけるに

源順

ひくもまれ

光ねの秋はむかしといひし人の秋
君はちりよきせきこは地よりのもの粉
みよしのすけたる如ふもと偏の時
よしのふ
桜をいの花名をうつゆとも桜はのの紫
しなも秋ものあはれつまでをおもひ
天暦の御かと四十の春たちよしは
明山神のるよ金峯山寺金經四十
出るちとのもと保昌しともつて法花
数府ようもそへてすいまにあそ

なりけるその日と風乃声きかのに
わすれの宿ともなるかなに
ねもすい
山桜秋山秋花のに桜とつゝて
ときいうきこまぶて行つるも
仲算法師
秋をのまゝこのまゝのはるかなる
この下よりたのしのまゝの秋
兼平の年中宮の御しるなの時
の道風よ
寿宗内侍

代をへぬ松と竹との末かけて
いはひしと君のよはひの千年
おなし契は竹の杖つくりて侍
りけるに
大中臣能宣
一ふしにちよをこめたる杖なれは
つくともつきし君のよはひは
清慎公五十の賀し侍りける時の屏
風に
元輔
君の代をなにゝたとへんさゝれ石の
いはほとならん程もかきらし

青柳のみとりの糸をくりかへし
いくらはかりの春をへぬらん
つらゆき
我宿にとくうゝる榊の色ときは
みちとせみつともしらしとそ思ふ
おなし人七十の賀し侍りけるに
竹の杖をつくりて侍ける
よしのふ
君のためかくつくる竹のつゑなれは
またもつきせぬよろつよも経る

佐山嵐はさえつゝくる清えなき舟の
いまのよろつよは深き池のためなれ
一条摂政中納言に侍りける時父の大臣の五十の賀し侍りける屏風に
小野好古朝臣
吹風によその紅葉はちりぬとも
君かときはのかけそのとけき
権中納言敦忠か母の賀し侍りける屏風に
源公忠朝臣
万代も猶こそあかね君かため
おもふ心のかきりなけれは
五条内侍のかみの賀民部卿清貫
し侍りける時屏風に
伊勢
大空にむれたる鶴のさしなから
おもふ心のありけなるかな
まつの雅のつきせぬ限は君か世の
年内のゆきとしつもれ思ふ
天徳三年内裏にて花宴あそはせ
給ひけるに
九条右大臣

桜色によひつもりしにそし野の
つくえ千年のまつちとよろをめ
難波江は　　よみ人しらず
かつみつゝちとせの春をむかへても
いつの毎はちとせよやくつれ
寿元元年　　乃子
君かためにはるなかのもなとわ
にたくまちよあいよかなき
康保三年内裏歌合千年まて
ゆくすゑ敷島のまつのこともかは和歌に
くりまつりくに
大臣の子の
めてたき千代のためし子日ははる
まつりそひとしへのまつ千歳
小野宮太政大臣よそ子日をさく
みち千代のためしを祝ひける
三条太政大臣　廉義公
松くまも子日はまつのためしいは
君か千年をいはひおきける

延喜御時屏風に　貫之

松をのみ常盤とおもふに世とともになかるゝ水もみとりなりけり

題しらす　よみ人しらす

みな月のなこしのはらへする人はちとせのいのちのふといふなり

承平四年中宮の賀し侍ける屏風に　参議伊衡

清椿りておもふ事もちとせいのまつるやをよろつ代の神のまにまに

天暦御時前栽のえんせさせ給ひける時　小野宮太政大臣

萬代にかはらぬ萩のいろなれはいまの根の君かためにそみへん

廉義公家にて人々に歌よませ侍けるにくさむらの虫といふ題を　平兼盛

千とせとそ草むらことにきこゆなるこや松むしのこゑにはあるらん

こやまつもりの錦はあきなり[illegible]

右大将源いゝ乃家より歌合

あきの紅葉とくかるまけつまゝ

うちよまたちにふかきよけ

見わし侍りけるもちとりのかう

流くるまて侍るゝまよりまぜ侍

よし

貫之

たか年のいたとのいつ見えきさけくて

ちとくまるくるかよ[illegible]須乃まて[illegible]

天暦御時清慎公のふところにて

まつはとうせんほならずて[illegible]

うしのよ

おいらく名称のおそしきを翁の

まねよたちくまのものとは

鏡いとこら侍るうしつ鏡

のうちをいつけとせ侍て

伊勢

ちるともあるかのやの乃ん浦はすむ

たつのちへなきり見春へわかる

たい新ゝのを

よみ人志らす

君の代をあまねく照す光まつ
ちかひも流きぬ
賀茂屋風いつかのふ凡
元ある
うき年たつき霞乃うちも
君乃光世

山女乃袖
ある
ふて流くもて
よみ郎

拾遺和歌集巻第六

別

あるところへまかりける人に餞し侍るとて

たちわかれ遥にいきの松なれは恋しかるへき千代のかけかな

よみ人しらす

あきゝりのたつあさとてきくるゝに

うらはのこゝろにおもへはこそ思へ

題しらす

きみくれはわかれのなからひいかゝ

わかれてのゝちもあひみん

ちる花ハ月もろともにいつるまておもふらん

わかるゝ人の心ちやいかゝおもふと

ものゝへまかりける人のもとにつかはしける

かりそめのわかれとおもへともわひしきは

菅原輔昭

唐衣たつ日をきゝてあさ露のおきてしゆけは

雲井はるかにおもひやるかな

天暦御時小弐命婦豊前にまかり侍ける時

まかりける時大盤所より餞給けるに

よそくのこまかつけ物たまふとて

清輔

夏にもなりつれはいへきにこそ
心えはまし思ひわけられ

題不知　　　　よみ人しらす

わかるともよ別るよはあつささの
旅のいのいてまかへ里にまさ
あつまにはことにゆかしきあらん
くるしも紀橋とよまきや有紙
見しもあはれ焼りし人のつきて六
いもとそふたともく香のわかる

天暦御時九月十三日斎宮くたり　徽子　天暦之皇女　許子中務卿重明女
侍りけるに　　　清慎

君かよを なかつきとたに思はすは
いかにわかれのかなしからまし
有明はわすれめ思へはわかるる人は

斎宮女御

かすみにもあらましと思ひしをもくもゆく
はかなくもしるしの緒にまたこそゆる
ものへつかはしける人はかなき秋は
よそにみつつりしける

よみける

別れをはつらき雨雲のたなひかは
あふきの風もをしまほしかりけれ
返し また よみて人につかはしける
あてはあれとあしたにまかふあはれ也
こゝろはふくまやうきもつらん
わらはちいさき人のかへこと
やくそくのことゝも見えて思ひける
ぬしはまことの人の返事をきかま
てしはるとそ つけゝる

わすれねてかくいひおこせたる
ほとゝきすのねもいまはなき
伊勢男よりわたりの程におもひつゝ
いひける女の親のもとにわたりける
ほとはすなはちて侍りけるに
よしのゝ
いまはかはしきこゆるかたもなき
いふあひたにやかてまつるとて
大江為基あふみのかみになりて
扇をつかはすとて

赤染衛門

おもひともなきものゆへにしこまての
わするときなくはたえすすゝめ給ふ
源のしたかふの参河のすけ為時
むすめの御母のよそに流つゝ
しはともしりねつかへの八橋は
ふかしとのみや思ひわたらん
そねもつまのつのかくはやくそくる
ゆるしも参議しるとて

源順

別はいつもうけれと明きこえす
いそのつまゝにわたるへき
信濃国よりのほり人のもとに
つかはせる

貫之

月影はあかすみるともさらしなの
山の麓になかゐすなきこと
菅家御下殿侍りけるそくら給ふ
り書あるひせんかくかはし
くるしきねたしなけくとて

天暦御製

和かの道ハいもせのこゝろのなくてかなし
ましてかきつくへき事いとまなきハ
天唐清明清めのとの雁信の出羽の
よろつ世侍りけるにこそ人なりけるよ
免ちるへしわかれにらくへしみける
よろつへ道たかひの係
えん人し次
いかなるとゝめなることの車もかはらし
たゝわかれ袖の雨ほしかねたれ
おもひのめ涙とのもしに旅上の

おもひともおもひかへす別をしほのへ
係まて　清少納言
おもはれもかゝしやつれんかたかは
逢さきりしもえやいともなる
女郎花人参河
東のかの草葉もとわかれ人をかれ
ちらは袖くらしつゝにほそかれ
影をしまて更にかの人しれ
おもひ道はまつるにたれもなれて
いつそちかへるてもまたぬなりけん

わかれちをゝしとやおもふつるきのはの
みをわくるこゝちのみこそすれ
源弘景あつまへまかりけるにさうそくた
まふとて　三條太皇太后宮
旅人の露はらふへきからころも
またきも袖のぬれにけるかな
橘公彬陸奥にまかりてわかれをしみけ
るときにまかりける継母内侍のすけの許に
まかりけるにかけしたるからきぬをそ
へてつかはしける

貫之
やまとにいのちのこときかしける
おもふうらはかくちへのまつ有ける
別れには
道くものひとのたかいにそはか袖乃
あすのたまもおもひつゝくに
よみ人しらす
おもひてそとまることゝもおもへとめ
わかれもてたちかへるよはのそて
みちのへまかりけるとき

いとふよの旅ねもかくとふくに別はれの
ん思ひくもしおもひやるかな
見まほしの人のつらさはとものまわ
まてはゆるさ弾正みこのうたやくれ
つかはす　戒秀法師
わかれゆくくるまをまちの有くかは
とゝめぬるもしらせわかみのおち
右京のまさたゝのこ有くかは
おもはれ晴ためにわかる思ひてぬる
侍るまなれはわれまちわひて下
侍るさまむかしはけしきもれそ

藤原清正
おほ人のあつまちはるかに行わかれを
わかれてはいつあひ見んと思らん
肥後守にて清原元輔下り侍るに
わかれ源満仲ときとしての道侍りけるに
けとかまて　中つかさ
わかれてはいつあひ見んと思ひけれ
かきりある世のいのちともなし
源満仲朝臣
君はよし行末遠しとまる身の

ありへはいのちなかりけん
みえしまて　清人我ゆへ
まくらあへて　わか恋しきに雲の
たち〳〵やまさむとくるやしらなん
右衛門　源兼澄女
なをさらしいのちなりけり思ひくらし
いもせわかるゝともをとこのもとへまかりける
つくしへまかりける人のもとにいひつかはし
ける
橘倚平
むかしみしいきの松原ことゝはゝ

わすれぬ人もありとこたへよ
陸奥守すゝへ下り侍りける時三
条右大臣太政大臣の餞し侍りけれはよみ
侍りける
参議為雅
たけくまの松をふたきをみやこ人
君かちとせをけふはよそにて
みちのくの白河関こえ侍りけるに
平兼盛
たよりあらはいかて都へつけやらん
けふしら河の関はこえぬと

長徳元年正月十三日陸奥守左近中将即日還昇　長保三年正月廿日卒　田園辭到来

実方朝臣下りみちのくにへまかり侍
けるにつかはしける

大納言公任

東路の木の下くらくなりゆかは
都の月をこひさらめやは

実方朝臣返し

旅ねの袖はつゆやかゝるらん
しらつゆのこゝろをもしらるらん

恒徳公家歌合に侍る
つねよしたまふ

志はすはかりにのほる旅人や
まよふらしとおもひてよみつれ
たゝの路のほとりにて雨ふる
ひて

貫之

雨ふりてわたるたこのしまもさりけと
岩まいつくしき淋しきの有ける
なみのまにしくしくわか海の
暁よもすからの月のよに孰る海の傍
かゝることをきゝて

伊勢

はるかすみたちのつかさの思ひきては

くさのまくらして千住にわかれを
おしまれけるによみて一句のはなむけ
おそ　よしのよ
草枕旅のこゝろ盾る月も
旅の夏まくらなりけるわ
影さして涼　よ見へしきと
春きのこゝろにつたれのくさ枕
千住にてかりぬあつききさき
源氏貞の太陽へまわりくまけ
ふりさきさと北湊そ月乃あすまりた

別きとて　芭蕉翁
いろいろ旅の宿よりもまて秋
うらやましきいあはの月
旅旅の涼のまするはいふことの・や
ともそ　よしのよ
名さも我やとそいふ野乃
いふとしかとも　こゝそゑ　あや
ただくへんまけすみちふそ
京之
旅路まい草の枕もむすびつ

おきなふのこゝろは雁もみえてゆける

帥伊周 はりまへまかりけるに川尻をすきて

はるかによそに侍りて 松崎をすくるとき

思ひ出もなきふるさとの山なれと

かくれゆくはたあはれなりけり

なかされ侍りて後いひおこせて侍る

贈太政大臣 菅

君かすむ宿の梢をゆく〳〵も

かくるゝまてにかへりみしはや

かきくもりあまのはらからこゑつゝ侍

くるゝ日のあけはなるゝよりうちまかりける為てと

かゝきせの 金昌仁明天皇時人也 承和四年九月十五日出家修

海の人にかたらひしはやのをちまさりて秋

いさともなし君をわすれて秋

柿本人丸 入唐

あまとふやかりのつかひにいつしかも

ならの都にことつてやらん

人丸入唐之事此外無所見

但古今之文有可見本

拾遺和歌集巻第七

物名

こうはい　　よみ人しらす

うくひすのすつくる枝を折つれは
こうはいかてかうまんとすらん

さうし

花のことをちかくいはよめていあるめきぬ
ほとくやこよちわきてかたりけれ

いゝやなき　　藤原ありけ

越前権守弘経六男　駿河大掾正六位下

ないひのいゝやなきとこうものかれ

草のまくらにやなくあけとも
とうとまのたふ

なく郡はいあまるともみちも
まさくるとうまさいちくよう有秋

かなふひのたふ　　伊勢

わらう海のおもて雨のふりつゝ
もねるを見え秋くはいあまのたる

かいつふ　　よみ人しらす

こきいろのいつしもとくろくうつる色
海ありうつしもつけれんも

ちくなれもとに　以光法師　藤原少将也

紫のゆかりいとくるもとしのく

草はみなわかと人もよくらし秋

志ゆけ　よ見ゆとしまた

うへて見る時思ひはきなる草なと

なしもつけんことはあやしもし

思ひたる

いのちはしはわかるにん花のはまく

まつるらぬやよるんとまるん

きたらく

ある人の許に梅ちるふる梅をつかはすとて

少将のもあへはなるくらん

あるしのはま

我宿は花の藤なのさくやまでまつ

いつなりせはあかぬちのものはちらん

西まうし

見すみなれ人のこころにまかせきつ

なけよくしとはおのも物うらう

題に

梅の野は花を見もはもをさ折つ来まさ

わかしくまて、くりともたえすもなく秋
かるまや　忠岑
しら露のいろはやいろいもとにことに
草葉のかくれにはまくれきをすは
はきの花
山川はまもみちはをちる秋紅葉さそ
をとはかちもとる桜はちるらん
まつむし
たきつせのちかきたまつむし流
ちるらしもれと山もとおちくるはめてきくる

日くらし
そこすとひかてわか秋紅葉わ
つま梨花
おもひくしの春ものそくるらす
松人はまそはつむかり深
やまのかはいに輝にそむきたわ
松のは桜のしやそゆきわ
たつともあかぬ風のふくね
ちとせ筆をけも
あらわれとしかととしくる桜へりつ

むつのあふまをきみをみのこへりとをあ
まつしこく
常の海いうこけともねかもちすし
風は雨のせていつもいぬるらん
やまと
ありはのかちにあやまとゆんいきぬ
歌手み草いそろきありすわ
いなさの
住よしの岸の松の木たちかね哉
きのふともいふこのいまし

こゝの海よあ海のましなたるをみへ
水もなく舟もかよはぬこの島に
いつこのあまのなまめかるらん
よみ人しらす
在原元方
うへいはし人もみなかくに旅寝の
たゝぬゑんよりはもとのまゝにせん
つらゆき
足引の山辺によをれはしら雲の
いかにせよとか晴るゝ時なき
在原業平朝臣
もゝのはなり

はくしよわゝ海ゝく勝と次もまた
たらのちとハのわしのミぞあら
うきのまへとい山寺に賀茂法
師の屋とまうて侍りけるにきゝちし
侍る法師よりあると云侍る勝ハ
よみ人しらず　次
あちを捨て山まへうきよのみち勝ハ
くまのゝくもゐにもおほつかなき
いのちいのちのゆ
あるのこハまうのぶなにさへなくいぬ

みいのみ松つハまもまだあはわ
まつふ松のこ屋丸
もとすけ
くさも葉もこゝろみどりはあき
あふふ松のうやしろく松まん
ふくきのはま
志賀山越紀
あるあふとまのこともあはわある
さるかれとむはことはさてわる
なかのの遊　かねもり

おほつかな雲の通路見てしかな
とりのみゆけはあとはかもなし
さいこうの延　よし九人
あはれしれ別し人のおもかけを
さいこのさゆかやまおかはるゝかな
つくのたけ　紀輔時
かゝ火のとしはきるかはるかみえてつゝに
ちかはしつゝのたけいそわくま
むは浦の浦　二条向早妻
津ちいのこゑはるのそやくはるゝ
たつたの川のかみのゝみるの
きくの里　もみけ
いつれのはいしもくちまそかたに
きくのみちいつもしつはわされ
をふれて　任慶法師
五月まつあめのきかはほきまち
ゆふかいふかのへむしるかわよ
夏　まちけ
心とし すまきむすはいるこのよく
くさ出かるゆふへな有名

りしを見　よの人〻は

おほ殿よりはいかなる君たちなりと

こゝきこと〻侍りともうるさき

御すゝきもちけ見

いかしへいもとらりまゝわと浪わけしいそ

とのすゝきぬもいはまくゑし

秋のまこゑ

池をりまこゑたる殿のほとりけは

いかのくもよわかまつなるすへし

まつたけ

わしりの山水のわか秋よりうへまて

そのゆふへたけあやふからん

いとへともつきることをかへらめ

まつたけかゝるわたくしのすめ秋

をたち

山すみそもの色をもみかへる

みつたちわつる年宗のおな

こゝろやく

秋も月も見いはぬかきいりわすれつゝ

こゝろやくよりそふるつきへ

ぬやしまれか　司馬相如
いとまなきもしなもの体たらしへしつかや
志つまかく雨とそなつまとひけは
きしのをとわ　ほとけと
阿なりのをとうまか雨をき雨なしは
うきにしみをぬなちとふけれまし
山家人
み菓は小夜のなかにさそり雲まて
秋のなかへめくつまへしまに
のやくさ

あふさかのやくきのともつしはちかはまて
おやしくさとの名さへつらまわら秋
流くミ　大伴家持
西の山のあやしくあるにまさしく秋は
もとりつくことなをそわれん
とくもにおもひつるこのあかきさらく
みたのつきの雨もさしまて
つたくらめ　まけれ
あるいつゝくるかにのこゝ雨ゆ枝く　ほとく
おしたの風のところかなくの秋は

ちるらん　　　　　　　よしさだ
見よしのも山ふかつもん雲鳥
ひかりのひかりそ日の出にめかれは
きえのこるこそ　　たまき
なつ衣ぬいさけのこさてこそ人　いさかは
ひろやくちねと思なさるへし
ひ星のあめ
雲もかすみひとりのあゆくとあえつつく
ちるらの風に花まちかさ限
ちとし　政持

はる夜の月も手見てにほえんとかすみ隔
もとしあゆのまてふ秘書ことくへく
つくやまさ
わかもの分も称しよわせるさくは流
いけれつくや君はたひつき
うきまのつま　　きけ雅なる
この宿いまるのつまそも見えてしかる
あめし山のうも世のありすとよ思ふ
きつてこ　　よみ人次
あやまのふてやしあり跡のあふ人の

しるしこそ物いはねとも秋の
さこやく
春風のけしきやかはらぬくれ竹の
花はちりてもちりてなほわ
雨の里
霞の並は峰のかゝる霧そかくしは
秋くれてあきもそこは恋やつもる雪
とちとゝくれたらは眠
きぬけと
思ふとも〳〵尽もかへし絶えぬなれん

なちは行舟にしうつる人多し
名たちは色の枝き
足川の山はまたは菊の花ちもとは
以久の秋しをさそあかまほ如くなる
君のみ遠へ
はかなの雨のなかは都にくる思は
あかの月へのとえ月の見つるる
花なくのひきよ
たのしむのまうもこそたつまきは夜ゆの
まみ遠てついのんと多く成まると

いつまでか　たゝね
ことゝもきこたにわつはいわつまりゆ
人のいのちまつまをやしなまし
をすとのことゞみへにるをうたた
なをらみ　あさけを
年もへて君もかこゝろねすこれ
ことつまやいうをいうかなき
月のきぬをきて侍りける
久方の月のきぬをいまるからも
ひかりハいろいぬをかなるらん

きこえのおのたこ
夜ともに侍やすあまやをなをりハ
あきこのきのいこのふてをちる
ちのかへし歌
うき身ゆゑこのうちのかしらぬ我かなく
かものすほとひや書りしまちと
へうのかた
すこへうのゝ侍りけて入ぬるの
まつ程もなくもなきもみも有難
かのゝいりのかもりのつき

かねのはの花のつきさ道ては山のこゝろは
わすれてたゝよかくまれはかわす
かのとは
かゝるとふかすまてきつゝとらん
沖なしほよるたゆるまて
のみとしふとを　恵慶法師
ともそしのはとしまてはもる禅師
東やらもたた秋の山あすま
ねらしとしたえつく
よみ人しらす　次

一東のうへうしとしらまうは思ひ知
うきなたらつこゝの他わかなは
むまとりてくるとわいあ方
むまみやわのりはらくいのはまる
えもゝはいあへまき人おもてほませ
平十九日　もけと
旅風のよものゝちのわたるつきつこ
ふくまとらきぬる
紅葉のちりな

拾遺和歌集巻第八

雑上

月を見侍て　中務卿具平親王

世にふるに物思ふとしもなけれとも
月にいくたひなかめしつらん

清慎公家屏風に　貫之

おもふことありとはなしに久かたの
月夜となれはねられさりけれ

やまてらへまうてけるに月を見侍て　大江為基

なかむるに物思ことのなくさむは
月はうき世の外よりやゆく

法師ならんと思ひ侍ける比月
を見侍て　藤原高光

かくはかりへかたくみゆる世の中に
うらやましくもすめる月かな

冷泉院の東宮におはしましける時月
を待つ心の歌をのこともよませ侍けるに

藤原仲文

在明の月ハ光を待ちとくり
わか世のいたく深けにけるかな

参議玄上のむすめ

まへもなきものとて住ミこし道
て侍るもの

伊勢

雲井よりあひ見ぬ月たにも
見しまてかはしにいはすかし

花山のはるにまて待かねし乃
鳴るもつけしたまへ

素性法師

もち月の駒ひきわたる逢坂ハ
たなひく山にて流る

風乃絶に 貫之く

常よりも思ひ渡る山乃端乃
もみちをわけてそ月影

凡河内躬恒

久方の月の桂も秋ハなほ
もみぢすれハや照りまさるらん

清見かた人ためしなき水上の月
とふ影もとひまさせ侍りけり
左大将御時
水のこゝろやとまる月たにうつるらむ
しらなみやふるあさくにあらん
式部大輔文時
よのなかに月はしつかにみえしを
氣のうちもや思ひそまし
陰日乃あふたよ今夜友近かもと
よろつはりけり
中正夏

年ことにあふぬ海やつまもまれにて
ことゝふかくいうちをしつもりけん
い
圓融院御時屏風歌奉りける
きゝつゝそいそきましける
忠見
たなはたのくもわにしつむ月なれは
ひのひかり影乃すきゐる(?)らん
横中務卿親王の家にてかきたる
乃鏡のいたよかきつけ侍りつ
伊勢

音羽河せきいれておとす瀧つせに
人の心のみえもするかな

中務

君の代のなかきためしにたえぬ瀧の糸
延へてみまほしきものにそ有ける

題しらす　　貫之

ちつまく瀧の白糸まきして
いかなる玉のをとかなるらん

延喜十三年[illegible]屏風の
歌によみて

あのまく雅たかみのいさよらよりおちて
わけとゆくまきておつる白玉

大覚寺に人〻あまたまかりけるに
ふるき瀧をよみ侍りける

右衛門督公任

たきの音はたえて久しく成ぬれと
名こそなかれて猶きこえけれ

題しらす　　躬恒

風ふけとところもさらぬ白雲は
よをへておつる水にそありける

野宮に斎宮の庚申し侍りけるに松
風入夜琴といふ題を讀侍りける
斎宮女御
琴の音に峯の松風かよふらし
いつれのをよりしらへそめけん
松風はむかしにかへる琴の音を
きけは子日の松そ恋しき
天暦御時名ある所々を御屏風
よのことを絵にかきて人々に歌よま
せ給ひけるにとりてところをこゝろを
忠見
尾上なる松の梢はうちなひき
浪の聲にそ風も吹なる
延喜御時御屏風に
つらゆき
雨ふると吹松風はきこゆれと
池の汀はまさらさりけり
村上御時大井に行幸ありて
人々に哥よませ給ひけるに
大井河のかはへの松にことゝはむ

のこ添侍けるやうなしかうしも
住吉よくにつもりの明神の祭し
侍ける舞人かたちかくろもとめて
よみ侍ける歌
もとよりのこ雪のまつふるもてみようの
松のちとせ掛としかみのよはひかな
立象の明侍りのもとは座風は松
の添よ侍りける歌 伊勢
海をはるばる松のかみとも

いつしかとかしこの人のこゝろのまゝ
揚今のわかもと添人のかめる侍つる
社をこころよき鳥のゆきを侍て
よし続ふ
守侍海の浜小松わかみぎり鶴の
松けりもとしとせてたのまれぬ
新古まて多年とし次
かこの浦松原に立なつ底
あふみのくゝすへなり
見ひてるいたる人今もの忍へきよ

かゝまうてはへ（？）りけるに　よしなゐ

いつそ我か宿に見えたけにやなゐ（？）

松ともなれん松く人のなれ（？）

河原院乃古松をよみ侍る

源道済

ゆくすゑのしるしはかりにのこるへき

松さへいたく老にけるかな

おほいまうちきみ清人しけ（？）

世中を思ひぬ（？）

ふりはてぬまつとそ我見ぬらん

つまにをくれてなけき侍りける頃

のきしかきつ侍りけるをくりに

けり侍る　貫之

るつによしあるもの乃はこ

まつもそかりやなきとかのうら

あはれの乃みえしをとはちよまつはて

まつわけは

源為憲

よもにあまりのいくつの老いしをき

なみもさのよる乃ことさへる

影さへてきて　少人我ならん

ものゝ名は　いまたなすそうしにきよ次る
かたかいのたつみ都をさしてたまわ
うちさみれはし信のはは是非
わすみそく人のまるやつまれと
出家にまかせは滅りりてくの名
まみへ　左大将海時
紛はかりてとしみ錦をそ起れ
うやめくみそく人のうかれん
天暦の御時の屋風の絵に女郎の
くく経のわつゝまのこゝろつうゝ四まさ

人あもき
斎宮きよみて
ありあまねめかまり大和の國の人相
むしのみともしつくたわりぬ里
太宰大弐高遠にしたかへにまかりて
きなかまけり鏡のつとたかまはの
かなくきつけて給わる
ト元人まさ
くちまとまかそのまおつを
あすたのし新き人りまつとおも
大弐たゝみのたるもの人のたとえあゝ

かりて桂にいたりける時女のもとへ
まかりてこのをんなのもとにいひつかはしける
ゆきかへるなよ里人は雲井にありなから
さとの月のめぐりまてあふをまつらん
題しらす　　　　　貫之
今日月はむかしのよにあらねともかはらぬ
ひかりことを見るかなしきに
清慎公月様よ御のまかりけるを
きこえまかりておもひ侍りける
藤原経生

むかしわすれすのこころのみつれ
月なれやしのめにいそねは
菅原大臣家にて月の夜によみける
のよこ侍りける
久方の月のかつらも秋はなほ
紅葉すれはやてりまさるらん
題しらす　　　　　人麿
月草に衣はすらむ朝露に
ぬれての後はうつろひぬとも
ちかくに人はいふともをるまてかれす

なにものにしつきあまたきぬ
久方の月かけにきえぬをなやしくも
わかれ行もての山のはもちかし
志ら浪はいふなと衣よかとみける次
あつまもまもとものうらく
もゆるへ流のしたま野のあ
夕まきは衣てとれしよしもこの
ときへなれきぬいつやきん
あかさら〳〵御情乃あきちかくよみへ
而
勝古家下　管

こゝはまたえしも尾とかまもあまふのう
文とようおそもよ松もいはつらふ
うきことふかれとも
あはれ御むかひてもせあまさくらあいさ流ん
在のさきにもかへさまたくはいの佐
つのきとさ〳〵御情の晴いもをとの女
乃もとにつのしりかあらん
定文様花押不見之
奉完之
うき世にいはに門ともとめとふかつ
あるよりの女のかそへにもよらん

中宮長恨哥の屏風に

伊勢

木にもおひす羽もならへてなにしかも
なみちへたてゝ君をきくらん

大江のちさとかあつまへくたり侍りけるに

人麿

としへぬる山やまのさくらの名のみして
家たふるふる里の人もなし
たつきをしらてけふも見るらん
山のはのまちやしつらんいたつらに

のなくなくもゆかて　よしの山
霞のそこにたちかへりつゝ　たのまぬを
さくらはなにもまちつゝ日をへて鳴
もろこしのさとのあはれのなかめをも
なにをかはしらてゆくへをたつぬへき
あきのよのながきおもひの秋の山
その面かけをしのひつゝ
福州のなかにて三輪の山をこそ思へ

もとよし家

三輪の山さえてかすみの中をみつゝ

もろこし人はかくこそいへるなり
舞する手をのへあまたのをとめの袖の
かへるを侍る時よめるとも天津風の
の雲の通ひ路のよそへつゝし侍る
あまつ雲井のをとめのすかたしはしとゝめむ
をかよはいそくれまたはふしもゆらふ
詠天　人丸
天の海に雲の波たち月の舟
星の林にこきかくる見ゆ
萬葉をよみあまた

川の瀬のうつまくみれは玉もかる
ちりみたれたる河の舟かも
山をよみ侍る
なる神のをとにのみきくまきもくの
ひはらの山をけふみつるかな
詠葉
いにしへにありけん人も我ことや
三輪のひはらにかさしをりけん
題しらす　貫之
人しれすこそ思ひそめしか

なのりそやつまんかひやひろはん
伊勢乃うみのきよきなきさにしほかひに

人麿

あみのうらにふなのりすらんをとめらか
たまものすそにしほみつらんか

天暦十一年九月十五日斎宮下り
侍りけるに内より硯調してたまふとて

能宣

思ふことなるといふなるすゝか山
こえてうれしきさかひとそきく

円融院御時斎宮下侍りけるに
母の前斎宮もろともにこえ侍りて

天暦第四皇女規子天延三年為斎宮二十七

斎宮女御　徽子式部卿重明女

世にふれはまたもこえけり鈴鹿山
むかしのいまになるにやあるらん

あすかの乃女王をさめける時よめる

人丸

飛鳥河のしからみわたしせかませは
なかるゝ水ものとけくあらまし

小一條左大臣　師尹

まかりかくれて後ち

家に傳はる露のたまをまほりける時
おきて

小野宮太政大臣

とくみえてなかるゝなかれはいかにして
なをこのよろこびをしるらん

右大臣のつかさめしの時左大臣（雅信）なりて

よろこびてのちのつかさのかみをとは
まほしきをしるらん

愛宮（九条右府第五女母同三君 西宮左大臣室）

年ふりてなからふるゝしはつの
いのちなからよそにあらましかは

大貳國章

なにことのうれしくもありて侍りしに
ゆめにこそわかれしつねなるものを
わかれにもむかしのこゝろに
いまはちかふくさはにもみつやとて
それとこそおもひしかとあはれなる

恵慶法師

中務

うへに夕暮草の露をはらはてはしかは
きえもせぬ夕きりのたちのぼる
ありのまゝにつゝみ侍りける京は
人のとふひよりかきてはなれはみ

越けのゆりとも

夜の衣かへしとかいふことは君かまうて
中にやとかまへ人のもとのわける
神のまつりの為に遣ます舞人何まつけ
て侍りけれはのいとおかしうて侍る

かへし

おしなへて今やとしこのいぬらん
をりふしのけふのしるしは逢坂の
二条右大臣　左近番長佐伯清忠
をとめをとうちはくすかた侍りけるとの

うれしと侍りけるかへしいかはかりたま
かはらのそれとも侍りける歌
思ひまゐらせゆふへのいのちそ〓〓
人のもとへいふへき事や有けん
かくをしと侍りけれはしるしの
しはしまて雪の袖をはらはんとて

よみ人しらす

うき世にはおほつかなくも〓〓の雲
めくりは思ひはなれても有明の
つきてゆくをは〓けり舞人

の所にいひおこせたりけるを
事なり　源重明
傀人はうき世の中はいかにしと
思ふこととへのふいとしきりけるま
事いさけれは　よみ人しらす
左みなかに事しぬ雨も見えてこそ
年經まりけるかたのつくもこそかは
よみ間をかさしをひくのかはくは
いふやあすにまろんとはたん
かとこ侍る女をきとらにけま

うし侍てあとこのとひつかは
しける
ひよへのとしのたくひはあなけは
きのといつわは
とりまとゝおもふ

拾遺和歌集巻第九

雑下

ある所に春秋いづれかまさると
とはせ給ひけるによみてたてまつり
ける　　　　紀貫之

春秋に思ひみだれてわきかねつ
時につけつゝうつる心は

元良のみこ承香殿のとしこに春
秋いづれかまさるととひ侍りければ秋も
をかしう侍りといひければおもし
ろき桜をこれはいかゞといひて侍りければ

大方の秋に心はよせしかど
花見る時はいづれともなし

題しらず　　　よみ人しらず

春はたゞ花のひとへにさくばかり
もののあはれは秋ぞまされる

圓融院のうへ鶯と郭公といづ
れかまさるとおほせられければ
　　　　　大納言朝光

折からにいづれともなき鳥の音も

いつとなくさめん時かわかぬなきを
見れはたゝこれにことかなひ
冬誹諧
しもかれはわかくもいつもすれしなし
萩の下葉もまつ紅葉すれん
こたふ　見れは
ちるとしもなきうちにうつる梅花は
まつ紫やうにかはるらん
梅花はいまこそ色かはりつれ
梅の花いろとおもへはたゆむさと
冬の見る

又とふ　こたへし
ちとせふる松の下葉のうつろひて
志のしたつけりしいつまて
こたふ　見れは
松といへと千年のちは梅か香れ
ますひろ松の下葉もかはる
見るとふ　こたふ
しろたへのしもきえぬ月をも秋の冬の
ゆきもふるのもしとふかん
こたへ　見れは

むかしの歌はよみけり人のあはれを
いとをしみて世にあらはしてやはらけ
ことば　伊勢
よろこびおもふ心は心ありけるかなしき
なをふかく月をしるしりけん
こと　業平
猶ふかく恵みける人のあはれを
よそにも月を見て秋をしりけん
今のあはれを知らぬ人をたづね
古人さりき

水のあはれをしるべきを心ありてこそ
ありしかとせの人のあはれは
古歌ふるきゝ集にあり
業平ゆかりの事なれ
恵心僧都
たぐひなくてなき物くさはなれ
ありつたふとかやしたまはり
ありしものつまの限り
このうへ
人をとひてもいふべき事

ちらさらむともたれのとくさき
歌よみ侍けるに 人々
あつしのちにこゝろをとゝめし人を
わすれしともおもひはまたもくる
健守法師仏名のあしたにまかりて
ひさしく侍けるとしにつかうまつりける
源経房卿下
ふるさとの梅はさきにけりいと
ゆかしくもとはまほしくて
健守法師
とふ人も

山里はゆきかきわけてもかくてこそ
いまそとゝのへたるやうの梅のさき
慶範法師の房にたちよりてきゝ
たゝすみ侍けるに
右大将道綱母
こつ海にあをまなるよしのすきかへ
みかきりへてもこきいそなくなる
中よわ人の家に侍ける梅をとりにやらせ
侍けるに家のあるしの読みて侍ける
おかしの女まつくれになりて侍ける
勅なれはいともかしこしうくひすの宿はと問はゝ

やとりとていのこちへん
まくらさせ給ひしに御返し
あかつきまて侍ひ侍る法師のまうて
うへのあまたの侍るよしきこえける内
よわもちを折てとゝめて給へ
いふあかし宿よ秋のやみたるに
聞にもいひつかはすと人もとに君給
月を見侍て　よしの山
あまの原さし昇にかたむく山端を
いさよひの月はさしていつるらん

かをりにほひて侍るおりふしこの君にてこそいとおもしろき
いまはふかくわすれてもかくてこそ見えさせ給ひ
ひもとかせて侍るをきけは
伊勢
思ひわかぬ君かいへゐにおりこし河
あをしやかくうれしいとほしの
能宣の車はかかもとゝめよつはて
侍りけるにふるめてとりえて侍れは
藤原仲文
かたをかしてつかはしける人　あまりうれしき

かけなとも物しとおもふなるへし

也し　うし笠

すとめへい松かねのもとや水かさかん

さつやのもとそてにつまける

曾禰好忠乃つき恋よあちさゐをち

あはなすあしのたなけ乃るあなたる

恵慶法師

あまはゆ江の井のとふけ侍り　ゆ香い

つのくにのいのこ侍りや有らん

康(?)ゆのこよそ侍ける人のもとよりそ

侍らぬ歟

重之

あまはつさつまあへ房い君の成よ

あし侍りうちそせあいそろへし

得哉の傷よ傷つまえつきそ房らし重

たらふ人よあそひ侍りて

都よい侍従とそらくつ乃くに参

すこうしとゆそしともとうと遊へ

あまいりそへしにあ侍女まつ里

たゆまそ房てもとしたそゆる侍

男のあなそうてまてあ房きとはよ

さかりてみちにて侍りけるにまを
人なくてとしをへにあらむ里にて
寄ことゝふとよりつゝもたまはれ
はなれこのよろ侍りける
君なくてあしの葉にしけきとも思はも
いとふかきいのちの行ゆく記
花
たのかしらのきとなくも何かなを
ふかつ難波の事は侍るまき
伊勢のこゝやとはかりこたへそめ
清見原天皇の御時諸兄内

申の院のこのをすくみにしけるかき
申をゆり
おほきに藤原景愿の恋しとてゆきしかへし
村上藤原景愿代明女之 景愿ゟ藤景紀女御を明敦之女
いまの女御の方につかはしける
夕つけいこの恋つゝはたと翁
藤原景愿 やまとの
延喜御時 藤原景愿 可勤
なき人のあることとおもふ小女なる
思ひそめ袖ぬれつゝなかれなる
地獄のうちのさきにおちて
菅原道雅女
ゆくへを川のみなもとをしらすなかれ

あかこほもとどめてかくるれ
よその梅にもありまくれて侍りける
むまこの侍りけるに無素侍るによみて
をりなくまつにひとつといひつかはし
し侍りける返しは
皇太后宮権大夫国章
てくしよるものりしめいまゐりしかへし
つきおいし秋のおかつまにもわかわ
源重之の母の近江の国に侍りける
まむまこのやつまかわ重之のもとまて
いとくし事侍りてえこのたひはもの

そのちかきわたりにて侍りけれは
おいの女のよみて侍りける
あやのおやと思ひましのゆともの遠
ひとこのまにいかゝはかなかるらし
まつしまて　人かはの
しらすとも夕日のかけのいあさち原
はるみえわたにみえよりすゑの世はまつし
貫之
をくらやまてるか山はゆふくれの色もなかりけり
よるの秋は日かけもなきとゝいふのも

よみ人しらす

冬のこもりまちつるもゆくゝ梅津川
みをもたえぬしも氷れる水わ
あすはいへとく春もゆくらむ河
きしはのにほふ人はねのあまり
西宮日おほはりもとまつの木の下
きるりのもりのつれはたえつ跡くれ
東寺きのか秋
左京にあり尾さきあはれあはれ金之
太秦川此のあふまつ有けれ

いにしへのさとやあさましきふて
仲文
河の瀬にのとはみえにあまるをそのちき
いつまてのあはれ此たかゆる世をせ
天暦御時一条摂政蔵人頭にて
侍りけるにあはせけれはこれになかに
しけるをけしきはかりきゝてかへし
ちゝのかはいつれたよ
ぬめとて
清輔
しのはれむ人のこゝろやの人もとまら

天徳のこのかはのつゐてにみる
内侍るに右大将實資かゝる
いはほゐたる瀧にこゝろもちはのうへにて
くみかはぬものにもぬれてかきよせし
てなれしすそも見えぬなり
小野宮太政大臣
山かせのふきあけてみたるしら玉は
おとにきこえし瀧の水上
なし
ときかぬもちとせのはなのさかえける

からまなはかりふかく瀧はなつにすゝしき
おもひつゝ
せみのこゑかはりゆくやまかけに
たきのしらいとはなつにかはらね
よをもなし瀧しらす家
清原元輔肥後守に侍りける時かの
国のつゝ九の瀧といふ所にて見侍りけれは
かはのたきのなかれをもよりこしやまのなかにて
恵慶法師
よしのゝ瀧のゆくすゑは
立まさりつゝ九の瀧もとゝろきて
よしの川のたきつせの有ける

三位國章ちいさきうりを扇におき
て藤原かねのりにもたせて大納
言朝光の下臈に侍りける時つかはした
りけれは

おとにきくこまのわたりのうりつくり
となりかくなりなる心かな

返し

さためなくなるなるうりのつらみても
たちやよりこむこまのすき物

みちのくになとりのこほりくろつか
といふ所に重之かいもうとあま
たありとききていひつかはしける

かねもり

みちのくのあたちのはらのくろつかに
おにこもれりときくはまことか

廣幡中納言家の女に旅人の
をんなにあひたるをうらむる

藤原為頼

わひ人のすみける山のいつはりの
ありけりしのもしのみやけりけん

ちまたなれゝたつるの山なれともまたい
なりにあらしける風もかよふらん
ゑちの尾よまゐれ通る法師よ名立
侍りけるにかねさたもとよりきこえ
返ことにいひつかはしける

い隆おほいきみ

ちのはなのさかもとは山とやひかへる
君かあるこゝは峯や有らん
みさけよとしおいてまて侍る

中ともまさ家

ゆめへしのちのよもやきこゑんよし野山
山さわこゐるきしよりなか人
大隅守さくら鷹の思信か家に
泉すこしあまのつえよかららまさ
たきふのへそのはなのあな
光りそゝ雪はしらやもといはぬをけと
さよと見ゆ恋みゝかいちえよみける
中納よしわかれてわかるまねるかれ

隆頼卿

まひつゝ見えすこなたの風新しき枕かな

見渡はすゝきかすゑめくかきこなまやあまこえすきまれし

柿本人丸

ませのとも見つゝかとわすれいもとあらんかも

たまゆらをたちゐ恋のしけきことの

かの草も風さそふことしきりふかれあまた

つゆも君かきまのたえん見えまくをなもん

女のゆくえは風のまま夢かまけりにくく

いひまかふくゆかいありしかは

源のよしあきら

あさきゆめも心にかくるかたもなし

たえぬはなとなきそへてものおもひかな

なさけなし

おもひそふ文よりまさるかな

人麿

ちりぬるやひの花見えむきくちよみなれ

草やさかしてのはてもやまかはのせにかよひと

見えつるを うらめしの花をこそ頼みにしてかに

空の月 ほしまよふまで もとむきの 影清きやは
照そへ あたら河水 いさよふへ 夕川の月
この河水 たえせぬ宿と この山も 月やたのしき
今宵は住 宿の空に 見飛とあらぬかも

返哥

見飛とおもひける 川の月さへ
たゆる時なく 影まとかくて澄らん
当乃志ろしめす事を 欽て勧解
判官 源志かる
是の年 ……

山もとむ見 風もさそはぬ 影ちる色 かはらなし
あるゝ舟に いかもれに まとひぬる みなとこゝろ
なかるゝ川 橋のに見え 菊のをちる ゆかしき夜の
よるの鶯を 夏は見る夜 もしほたれ 蛍をも神
春るつけて 冬は花かと 見るほとの この月の光
影もかよふ 雪を飛ぶ あらためて 山かへ出し
見ちかへるを 月のさ空 あかる舟は こえしかしこも
河籟の夜 下にのこり 志つとりて たえぬこの月
まの水り なく露の音を ひとつの 雲のうへまで
かく雨をまつ たてや橋の 高くかゝるを とほくかゝる

人ハなまめく　くれなゐ色に　名のやまぶき　世にハうつくし
まことの色は　松はうつろ　おもひあはれと　名にとまりける
めつらしきん　まつはうつせし　しぐれ添　たえまちにいく
移りかはれ　ゆふもとの岩を　なき岩根　来るゆきよ
君をしは　あはれふかふ　きつめしと　あはれ吉野ゝ
うきは只て　ちるとしきかは　折はなほにも

夏

在野ゝ　思ひハくる　日影にかゝ　えも忘るゝ
なきもの　かすみ山の　まつうと　かすみととく
まへときの　霞も八重　つのえんと　たゝき折とて

ようゐ

かくれぬ浪　きゝよわぬ波　あやな草　あやなきさかさ
人なきに　かはらをせ　おもりつゝ　せはあなる香を
君わりも　冬はとのつ　夏はまつ　草は花色
あつめつゝ　花ともやなき　いとゝつゝ　月のうつる故
かつまれし　四方にはち　香のあはれ　在なる人神の
媛のみとそ　冬もなくに　いまゝなわ　くの下紫わ
くれなゐに　うつろいけん　枝のあいて　まつかな深ん
為わりも　こたの松浦と　花もつせん　めとしれなく
吉野の雨　雨ともしに　あまつもて　在をしも思れ
ふる川あけ　なきつゆかけも　かすみつゝ　露かな人の

おにかけて 思ふへしよ もとより あはれとて
ところの 雲井はるか なるへけれとも
身もあはれ
男の 男の物いひける 女のもとにて
まけはてゝ とし月をへて きこえけれは
待かねる かことのよしを 待るかな
よみ人しらす
いはねとも いふもまされ やとる たちまちに
あるらむに わすれやしは まつらやま 行まほしき
流れ来て 雲のかよひ路 かよへは 身もゆるす

むつまし かくもなく 結ひおきて つれなや涙の
たのめたる 定めぬ夜 なき うらみつゝ
人の心を 袖のうらに わか身のみ おもひとも思ひ
君なれは なかなか あかぬも 我のうらは
うきふしは こよひはなとか ときしくれかな
世の中の くやしきも 流るゝ人 思ふなみた
待ち暮し 君かゆくを かへすとも かくすへき
ありし夜を 契りしは まつほとも 忘れなむ
きのふけふ 雁もなく あすこそは 空にも恋ふる
身はなれは 思ひしつ とまるの むすふの床

跡もなく かすみわたりに きえてのこれる まつのはの松

はなやかに 世をへても 雲井に出る 猶つもる雪

あととふらん

参議源乃清晴大将なりけり 傳を授

久しくもうつりそめにしせし 位なる

天暦十年五月

みつ乃宮の うや人と そのかみはかりね

東三條太政大臣

天徳二年十月

あれは氣

康保元年四月中宮安朔 日四年五月廿七日崩

何をたまへ 思ひとは くはまもし かさくも絶

たのみき くはさこそ くさくれなる 二葉の草を

吹のをおも あさきうへ あさりそ 世をき秋哉

康和四年五月立坊

にせきはは 雲もなくと 見えきては 色乃いろわを

なけらん と思ふを かくつ松をハ

安和二年三月十七日任中納言

兼春宮大夫参議元三位中将

さらしさ 花とき 冬やくと 尋ねしとまて

いかなり さはうけの 次第冊し 世への中なりと

安和二年三月十三日践祚 九月廿三日即位 叙正三位皇后崩

おもはりて 九乃のそむ うのふに やまも今も

ことさも 諸ふる波 小やまの国と 人の心やさか

践祚白太政大臣 寛和元年五月摂政薨

右大臣左大臣伊尹摂政

ふかくて 秋れとへ ふさそうて 二た濡とは

よそつて 此秋の ありき雲見 たまにたまも

十一月二十七日中納言兼通任内覧 天延二年太政大臣関白

と思いまさ 玄を雲 よこと源 立のいりやと

かそうかい 多もと帰ば かもいはき 命のあるいは

なからしハ　人はそくらて　ちるものを　思ひもきえす
寛和二年三月廿六日中納言為先例叙二位四月加任大納言
山川濁　見ぬ名も道　ゆく人も　うこきなきに
俤をしるし　ころもしてよ　ちかくみえ　かきなかしけり
同年十月十一日還補右近大将
澄海月　うきまきれは　とふらはて　とまりつゝるも
なきわたる　源しつゝて　かゝるうきは　きもこ月は
あはれわれ　なきよふく　こゝきよらかぬ　らうしのやまき
明くらし　思ふとも　さりにしハ　やうちゝ人も
あさましき　秋のなかゝ　さつかる　まつもとの浜
桜もりに　まつかけ　掻いやり　大あかの濃
つらからむこれ　つゝむりな　そのみれ　思ひもみえと
はるこそを　今はとてかき　きよらかに　霧のたつゆく
くちらるを　若の紫　あくとも　ともやこひしなん
年のをしへ　春の夜も　いましき　袖のしをれを
とはとかうるけむ
是の末なく　たゝいふ子の　とゝほしきたまれは
また流れて
あはれとも　いふへき　秋の露　みさかに
さりしかはるか　命をもとゝ
天元元年貞元三年六月廿日初参内八月詮子入内十一月為女御
天元元年十月二日任右大臣即日従二位同二年正月正二位三年六月一日皇子誕生
永観二年八月立第一皇子懐仁親王為皇太子
寛和二年六月廿三日太子践祚摂政七月一位准三后列三公上
永祚元年太政大臣二年五月出家七日薨六十二

拾遺和歌集巻第十

神楽歌

榊葉にゆふしてかけてたか世にか
神のみまへにいはひそめけん
さかきはのかをかくはしみとめくれは
やそうち人そまとゐせりける
みてくらにならまし物をすへ神の
みてにとられてなつさはましを
みてくらはわかにはあらす天にます
とよをかひめの宮のみてくら

冬深きとこしへにか神は山人の
ちとせをつけてきる杖そわ
よものやま人のたきにきる杖を
神のみまへにたてまつるかな
いそのかみふるやなきこのなかりせは
かけのちをきことならのふ
しほのかみめをきのなかちとせにけるき
あまめもとのみたかことた
ふゆこもりやなきちらんまたつ
なへともみ思のみとかへり

さいたまにおいまうん年よりめく
うつろひゆくをみせてハ
志つまとうまいふのかハりて花守る
野るゝのたねもとかハりうつきかき
住よしの神にまさりたるものゝゆくら
をたくしや人はまつといひまさん
あはれ人のかくいひて住吉明神のたくせんとぞ
左兵衛督二条道綱よみ侍りける
はつえの夢に清秋わとなる
さやきたるおほふのかきもともちてまゝ

うきたるをあけて見侍りけれはかくかき
て侍りける二条太政大臣なりて侍りける
夜ふるもれのかゝ原たもとハ山風
ゆきけるとうけてあはれとそし給
住吉にまうて
安法法師
あまくたるあら人神のあひおひを
おもへはひさし住よしの松
恵慶法師
我とはゝ神代のこともこたへなん

心のうちをたつねるもよしの春
ちこともなそ又侍りし一首

主上

いくよのかみのかはりまつりていへん君か代の
まつのちとせのかけもひさしき

源道方朝臣

下こゝろまかせて侍りけるに

元輔

おもしろき舟ひくのいりあひや松よ
こゝろもしらぬたちをとめく
ひとつの風に侍りてよみ侍りける

侍従實国

経まつく風ひくの風そよの松かね
くものをきにもことやめてきく

恒徳公家障子に

源兼澄

大よどのみをつくしにたれかあらん
神まつるひとしのいままつ

粟田右大臣家の障子に唐絵に

楼しらるゝ所にあまひくるかは

平兼盛

清撰ものゝふのしらまゆみ綱
神かくらひにうたふへきあはれ
歌之次　人丸
千はやふる神のもたせるいのちをは
たかためにかもなかくとおもはむ
ちはやふる神もおもひのあれはこそ
としへてふしの山ももゆらめ
安和元年大嘗会風俗ちかみ山
大中臣能宣
君か代はつきしの山のかはるまて

ゆけき雲のみすはかひて
とことはの松をいのらむ二葉
たのしくたへき君かよはひを
いはしみつ山よろつよはしはしき
うへしかすまきはよに君か代を
あらひの玉つゝ千代にとえつゝ見
見るこの山よしのの
ちはやふる神のこらかし榊葉は
とこしへに常盤にかはらぬ春にかへ
清忠とし次

よろこひのみちもかはらぬためしとは
みちのくの山まつ原あかれてまて
元長亭
百韻をこのゑのうちにたつうは
やまとのはにもみえたるけはひ
よしのふ
おほやけら
みつきつむおほくのことはきえ
色しけりまとよろつ代の色
こたへおよまてしほ
たの緑や玉のをかもへ山るへ

つくまつくるよ千代のするくく
かゝみ山よしみゆ
みつきけることのはもきえす鏡山
ふしみのさとのよそりあかつたのしき
松のときは
清原元輔
ちとせふる松のみとりはいくかへりみて
たのまんあふみあかねさす
かものやしろ
とこはなる時もあひ/\ちらかへすへし

かものくら橋のよあまおりつきしを

天禄元年大嘗会風俗

悠紀　よしのふ

ときよわちとせの山に鮮てに
君のみ代いとゝいのちへつゝなる
いやたかのやま

うもりやま

あふみなるやたかの山の榊葉を
君の千世をといのりてかさらん
万代のこの風

よしのふ

新しみつきのやまあさひあかしい
ちとせのうけまつそつかへん
いかにくらし
ふるわいに君か代々にすゝろつく我
うこきなきつくのくつまんとすなる
あかつ人やま

中務

万代はまあまりけつくゆへんのこゆく山
ちとせめはまるもすまもくもし

わかくふかきと　こよひの里

ともしこのひもえてまたおもくいの
ふるさとたのもしくおもふ月ゐかな
よしたの里
なかゐてふよしたのはしにつゝまなく
つくともつきし君のよろつよ
みつ河
みつ河のとくさはかりこそみえすはれ
とゝいつけすさはなきまくらぬ

まつのさいはひ
霞のほとむすはれたるまつのかすにつき
千代のためしをみるかな
延長四年九月十四日民部卿
清貫の六十賀中務卿敦慶の屏風
の歌
かくてまたくもゐのつる
貫之
足引の山ふきの花さかり
のけさきの花にかゝる

あまひとのうたのなか

人麿

おほぶねにおもはぬ神のこゝろし

いまそのむかしのことゝもわすれき

延喜二十年中書之

乃次のなり其筆使け

やまとくにの宮二十一首

これをたてまつりけり

為家卿書写

延喜二十年
紀友則等
二十年首
一首

ちはやぶるかみの御よの代のむかしやしめ
らむ

神もをりしと

そのいとしもや

拾遺　上　下